

【研究ノート】

銅像が示す地域性：戦国武将の銅像を中心に

高山 陽子

はじめに

2020年6月13日、明智城址（岐阜県可児市）に明智光秀像が除幕した【写真1】。1582年のこの日、山崎で羽柴秀吉軍に攻められた明智光秀が落命した。高さ2.3メートルの銅像は、明智光秀がNHK大河ドラマ『麒麟がくる』（2020年放送）の主人公になったことに合わせて設置されたもので、費用3100万円は寄付金によってまかなわれた【岐阜新聞2020年6月14日】。設置の経緯は、台座のプレートに以下のように記されている。

明智光秀 1528—1582

可児市（明智荘）で生まれ育った麒麟児明智光秀公のモニュメントです。光秀公は高い教養と戦術、統率力に卓越した能力を発揮した戦国武将であったと言われています。さらに家族や家臣を思いやる心優しい人柄で、領民からも慕われた名君であったとも語り継がれています。

人々が穏やかに暮らせる、争いのない時代を願って可児から雄飛した光秀公の



写真1 明智光秀像（明智城址）

思いを受け継ぎ、人間愛と世界平和への願いをこの像に託し、世界に向けて発信していきます。

彫刻は、日本藝術院会員神戸峰男氏に制作いただき、題字は臨済宗相国寺第132世有馬頼底氏に揮毫いただきました。

像の建立にあたっては、多くの個人、団体、法人からの寄附金や募金が充てられています。

令和二年六月吉日

可児市長 富田成輝

また、2020年5月19日、静岡駅前は今川義元の銅像が設置された【写真2】。桶狭間で織田信長に敗れた今川義元は、歴史ドラマや戦国ゲームでは「麻呂顔」の滑稽な姿を披露するのが定番となっている。2009年放送のTVアニメ『戦国BASARA』における今川義元は、籠に揺られながら「旅は苦手おじゃ」と言い、鼻ちょうちんを出して居眠りをしている。終始、「おじゃおじゃ」と言って桶狭間の戦いであっけなく殺されてしまう。このようにTVアニメやゲームでは極めて戯画化されているものの、今川義元は静岡の人々にとっては地域の礎を築いた偉人である。彼の白塗りの顔と公家の服飾は、今川家の格式の高さに由来するもので、当時としては真つ当な姿で



写真2 今川義元と竹千代の像
(静岡駅前)

あった。フィクションではない正当な形で地元の偉人を表現したいというのは地元の人々のたつての願いであり、市民団体が寄付を募り、駅前の銅像設置につながった〔中国新聞2020年5月22日、静岡新聞2020年5月15日〕。

幾度もドラマや映画、小説において描かれてきた戦国三英傑（織田信長、豊臣秀吉、徳川家康）の銅像

〔表 1〕 主な戦国三英傑の銅像

人物	設置場所	分類	設置年
織田信長	清州公園	城址	1936 年
	岐阜城公園	城址	1988 年 2009 年移設
	安土駅前	駅前	1991 年
	桶狭間古戦場公園	古戦場	2010 年
	岐阜駅前	駅前	2009 年
豊臣秀吉	豊公園	城址	1971 年
	長浜駅前	駅前	1984 年
	常泉寺	その他	1988 年
	墨俣城	城址	1991 年
	大阪城豊国神社	城址	2007 年
徳川家康	岡崎公園	城址	1965 年
	岡崎公園	城址	1992 年
	駿府城公園	城址	1973 年
	浜松城公園	城址	1981 年
	江戸東京博物館前	その他	1994 年
	静岡駅前	駅前	2009 年
	東岡崎駅前	駅前	2019 年
	静岡駅前	駅前	2020 年

は、様々な場所で目にすることがあるが〔表1〕【写真3】【写真4】【写真5】、負けた武将については、近年になって、まるで従来の否定的なイメージを払拭するかの如く新たに銅像が作られる。その際には、明智光秀が「領民からも慕われた名君」とされるように、地域の貢献者であることが強調される。

戦国武将（1467 年から 1638 年に活躍した武将とする）には、武将の側面と藩祖の側面がある。前者は江戸時代以降、各種の軍記物を通して広がった戦国英雄であり主に甲冑姿で表現され、後者は近世から近代にかけて藩祖として神格化されていたもので、主に冠位束帯の姿で立つ。武士の神格化を論じた高野信治によると、武士の祭祀は平将門に敗れた平国香に始まり、江



写真3 織田信長像（清州公園）



写真4 豊臣秀吉像（常泉寺）



写真5 徳川家康像（東岡崎駅前）

戸時代には1672件の神格化が行われた〔高野 2022〕。明治以降も藩主の祭祀は続き、土佐藩主・山内一豊夫妻を祀る藤並神社が別格官幣社の山内神社となり、肥前佐賀藩主・鍋島直茂を祀る松原神社が別格官幣社の佐嘉神社となったように国家神道の中に位置付けら

れていった。

藩祖の顕彰は、藩祖神社の創建、開府300年祭、皇太子（後の大正天皇）の行啓に伴う城址および古戦場の整備などの複数の政治的イベントを通して行われた。銅像設置もその一つであった。これらは近代化の過程で失われる地域性を復活させる一つの方法であり、20世紀初頭、郷土史を形成する上で重要な役割を果たした〔羽賀 2005〕。戦国武将は、「郷土としての一体性を後世するための求心力を担う存在」〔矢野 2006:206〕として選ばれたのである。

戦国三英傑の銅像〔表1〕を眺めると、城址、駅前、古戦場が主な設置場

所となっていることがわかる。古くから設置されてきたのが城址であり、駅前と古戦場は戦後になって設置されるようになった。

天守や櫓を中心とする城郭建築が再建された城址は、日本名城 100 および続日本名城 100 の指定によって、地域活性化のための重要な観光資源と見なされている。歴史的な価値だけではなく、コスプレイベントの場所としても地域の期待を背負っている。姫路公園は 2016 年、「ひめじ Sub かる☆フェスティバル」を実施し、2018 年には城内の写真撮影を許可した。また、2010 年から小田原城址公園で開催しているコスプレイベントの参加費は 1500 円であり、当初、100 人程度であった参加者は次第に口コミで広がり 300 人を超えることもある。参加者の多くは若い女性で战国ゲーム「戦国 BASARA」（2005 年販売開始）に登場する武将のコスプレをしているという〔読売新聞 2012 年 5 月 23 日〕。とりわけ戦国武将を物語化して消費する歴女の影響は非常に大きく、地域で様々なイベントを開催させるまでに至った。「戦国 BASARA」を見た女性客が片倉小十郎（景綱）ゆかりの白石城を訪れるようになったため、各種のイベントが開催されるようになったのはよく知られる事例である。

歴女が好む戦国武将の物語がアニメやゲームを通してキャラクター化されたもので、必ずしも歴史的考証に基づくわけではない。このように戦国武将の物語を消費することは現代特有の現象ではなく、江戸時代に多く書かれた歴史物語にもエンターテインメント性が増えられてきた〔橋本 2016:13〕。銅像にも服飾などにおいて十分な歴史的考証を経たものと、エンターテインメント性強いものがあり、同じ人物が複数の姿で表現されるのは珍しいことではない。とりわけ戦国武将は、戦場における英雄という側面と、地域の礎を築いた偉人という側面がある。こうした多様な側面を持つ戦国武将は、その銅像設置の背景も場所も多様である。本稿では、城址、駅前、古戦場の 3 カ所の設置場所を整理しつつ、戦国武将の銅像の地域性について検討する。

1. 公園と銅像

城址に銅像が設置されてきたことは、銅像資料集『偉人の倂』（二六新報社、1928年）から確認できる。この資料には、明治期から昭和初期にかけて設置された632体（第2版では657体）の銅像について、所在地、建設年月、原型作者・彫刻者、鑄造者、構造、工費、建設者が記されている。2009年の復刻版『偉人の倂』（ゆまに書房）の資料によると、像主の職業・身分で最も多いのは実業家18パーセントであり、政治家8.7パーセント、武門8.2パーセント、医学界7.0パーセント、軍人6.2パーセントと続く。武門に分類された53体のうち戦国武将に相当するのは16体で〔表2〕、すべて1943年から1944年の金属供出で撤去された。

〔表2〕『偉人の倂』に記載される戦国武将の銅像 *城址

人物	設置年	場所	制作者	設置者
豊臣秀吉	1903年	大阪 豊国神社 *	高尾定吉	縁綏会
津軽為信	1909年	弘前市 公園本丸 *	山崎朝雲	大道寺繁楨
加藤清正	1912年	京都府紀伊郡深草町	谷口香嶠	北村宗次郎
蜂須賀正勝	1913年	徳島公園 *	石川浩洋	蜂須賀昭邦他7名
山内一豊	1913年	藤並神社 *	本山白雲	旧土佐藩有志
豊臣秀吉	1916年	姫路公園 *	不詳	岩谷栄太郎
前田利常	1916年	石川県小松町 *	不詳	小松町呉服組合
蒲生氏郷	1919年	滋賀県蒲生郡日野 *	石本暁海	日野町教育会
太田道灌	1920年	東京府庁 *	渡邊長男	東京府
徳川家康	1920年	東京府庁 *	渡邊長男	東京府
豊臣秀吉	1921年	名古屋妙行寺	太田真成	浅田利太郎
鍋島直茂	1922年	佐賀市上多布施町	諏訪頼雄	佐賀市長野口能毅他有志
前田利家	1924年	金沢市公会堂	吉田三郎	和田栄太郎
加藤清正	1926年	池上本門寺竹内	竹内久一	三須安五郎、高木金蔵
上杉謙信	1928年	上杉神社 *	瀧川美堂	上杉謙信公350年奉賛会
松平直政	1927年	松江城本丸 *	米原雲海	旧出雲藩士及び縁故者

注 大阪豊国神社は1880年創建、1961年、大阪城公園に移転。

銅像とは、実在した人物を顕彰するために公共の場に置かれた像を指す。日本語ではブロンズ以外の素材でも銅像と呼ぶため、本稿でも公共の場における人物顕彰の像を銅像と呼ぶ。この点から見ると、日本最初の銅像とされる兼六公園（現、兼六園）のヤマトタケル像（明治記念標）【写真 6】は、ヤマトタケルが伝説上の人物であるゆえ、銅像の定義に合致しない。日本における本格的な銅像は、1893 年設置の大村益次郎像（靖国神社）が最初であり、その後、西郷隆盛像（1898 年、上野公園）、楠木正成像（1900 年、皇居外苑）が続く。この 3 体は東京の三大銅像と呼ばれ、観光名所として絵葉書にたびたび登場した。

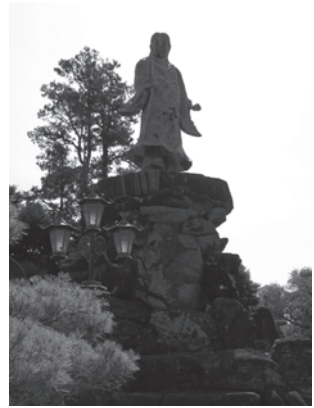


写真 6 明治記念標（兼六園）

日露戦争後、銅像の数が増えると、東京は銅像であふれ、設置場所に窮する事態に至る。その状況は新聞でも取り上げられ、銅像は設置場所を決めてから制作するのが理想であるのに、近年ではそれほど社会に貢献したわけではない人物の銅像を作った後で設置場所を探しているようで滑稽であるという記事が 1913 年に掲載された。[東京朝日新聞 1913 年 6 月 11 日]。

一方で、『高岡新報』の記者・井上江花（1871～1927）は、「高岡銅像論」（1913 年）において偉人や英雄などの銅像を公共の場に設置することが社会教育上、望ましいと以下のように述べている。

人物像を社会教育に利用し、兼ねて公園街路、建築物等の風致を添え美観を助くることの如何に盛んなるかは、欧米各文明の実例之を示して余りあり。即ち帝王・英雄・詩人・学者は勿論、苟くも国家社会に貢献せし大人物の銅像類は、都鄙到る所に建立せられ、特に都会に於ては其数甚だ多く、往々規模の宏大技術の雄渾を極むるものあり。欧米然り、仏国然り、就中独逸に至りては、之を国民の愛国心養成に利用するの周到なる、観光外人の常

に驚嘆措かざる所なり [井上 1936:143]。

高岡では、前田利長の高岡入城（1611年）に際して鑄造師を迎えたことから、古くから梵鐘などの銅器製作が盛んであった。兼六公園のヤマトタケル像も高岡銅器によるもので、高岡銅器は日本各地の銅像製作を請け負ってきた。20世紀初頭、高岡公園に前田利長像を設置する計画があったが、資料が乏しいという理由から実現に至らなかった。これについて、井上は「銅器、銅像の高岡を表示する所の該計画を再興し、類い稀なる金看板となすに至らざるは、商的知識を欠くの甚だしきもの」[井上 1936:146]と主張する。なお、後述するように、前田利家像が高岡公園に設置されたのは1975年であった。

高岡公園は、数多くの城址公園設計を手掛けた長岡安平（1842～1925）が設計したものである。城址公園は、1873年の太政官布達と廃城令によって、1887年までの間に全国で約80カ所の神社仏閣、城郭、大名庭園が公園化ものの一種である。東京の寺社では浅草公園（浅草寺）、上野公園（寛永寺）、芝公園（増上寺）、深川公園（富岡天満）、飛鳥山公園の5公園が選ばれ、常盤公園（偕楽園）や県庁付属地（岡山後楽園）、大名庭園では兼六公園（兼六園）、栗林公園（栗林荘）、城址では高知公園（高知城址）や岡崎公園（岡崎城址）、大垣公園（大垣城址）などがある。

長岡とともに城址公園の計画を主導した本多静六（1866～1952）については、都市の景観から論じた様々な研究がある [野中 2010; 2017、浦崎 2015]。本多が計画を手掛けた和歌山公園の場合、地元住民からの反発が強かったことが指摘されている。存城となった和歌山城址には和歌山中学校や連隊区司令部が設置され、1901年に和歌山公園となった。その後、和歌山市により本格的な公園計画が進められ、計画を依頼された本多が1914年に和歌山を訪れる。本多の計画では、保存の必要のない濠の埋め立て、景観を損なう石垣の撤去、イギリス式庭園およびフランス式庭園、日本式庭園の設置が含まれていた。この計画に対して、南方熊楠（1867～1941）と常楠（1870～

1954) 兄弟は風致の毀損を伴うことを痛烈に批判し、地元紙も批判記事を掲載した。和歌山県知事は風致の毀損を伴う公園計画を認めなかったため、和歌山市は原形を大きく損なわないような計画案を提出し、最終的に工事費執行が認められた [野中 2017:105-113]。

このように公園開園初期には開園および運営の安定化が優先されたが、大正期に入ると、過度な景観の破壊や西洋化には拒否反応が示された。明治期に市民の公園として公開された兼六公園も同様であり、大正期には地域のアイデンティティや伝統への回帰が見られた。これは各地域で郷土愛が浸透したこと、文化財の理念が定着していたことが理由と指摘される [本康 2021:41]。

城郭建造物の破損が広がる一方で、大正期には近世城郭の調査研究が始まり、1929年に国宝保存法が制定されたことで城郭は文化財としての価値が見いだされる。そして第一の築城ブームが起こり、模擬天守として、1910年、「岐阜市保勝会」「岐阜建築業組合」が中心となって高さ 15.15 メートルの天守が建設された。その後、鉄筋コンクリート構造の洲本城天守 (1929 年) と大阪城天守 (1931 年) が誕生した。これらの模擬天守は展望台という娯楽施設であるが、近代都市の新たなシンボルとして人々に受け入れられた [光井 2021:128-133]。

戦後、天守の再建は復興の象徴として、1950 年代から 1960 年代に復興天守 (鉄筋コンクリート天守) が各地で建てられた。その先駆けは、1954 年の富山産業博覧会に際して富山城公園に設置された天守である。彦根城や犬山城などを参考にした復興天守は富山城と呼ばれ、富山市郷土資料館として使用されることになった。同年、岸和田城址にも資料館と展望台を兼ねる復興天守が建てられた。さらに、1910 年に焼失した岐阜城天守 (1956 年)、浜松城天守 (1958 年)、和歌山城 (1958 年)、小倉城天守 (1959 年)、小田原城天守 (1960 年) などがある。1980 年代のバブル期になると今治城天守 (1980 年)、長浜城天守 (1983 年) などの模擬天守 (存在しなかった天守) が建設された。この時期、1988 年のふるさと創生事業 (自ら考え自ら行う



写真7 墨俣城

地域づくり事業)の交付金を用いて建設されたのが清州城天守(1989年)と墨俣城(1991年)【写真7】であった。

清州城や墨俣城などの模擬天守や城郭風建築の増加は、研究者たちに懸念を抱かせた。地域活性化のために城郭を再建することに異論はないものの、中世の城址に天守などの近

世城郭建造物を再建するとなると堀や土塁などの遺構の破壊につながるだけではなく、歴史上存在していなかった建造物を設置するのは歴史の偽造になるといった批判が寄せられたのである〔読売新聞 1991年4月21日〕。

そのため、1990年代から城郭建築の木造再建、いわゆる本物志向が始まり、観光促進と文化財保護の両側面が重視されるようになる。具体的には、2008年、「地域における歴史的風致の維持及び向上に関する法律」(通称、歴史まちづくり法)が施行され、城郭建築および城下町の観光資源化が促進される一方で、模擬天守や城郭風建築が乱立した反省から、2020年、「史跡等における歴史的建造物の復元等に関する基準」の「天守等の復元の在り方について」において、忠実性の乏しい歴史建造物は「適切な再現といえない再現」として好ましくないことが示された〔文化庁ウェブサイト〕。

木造天守の再建は、1933年の郡上八幡城があったが、大阪城天守のインパクトが強かったため天守は鉄筋コンクリート様式が用いられた。その中で、1994年に戦後初の木造復元天守を再建した掛川城公園には予想を越えた多くの人々が来場した。この成功は各地に木造再建の流れを作り、各地で櫓や大手門の木造再建、佐賀城本丸御殿や名古屋城二の丸御殿の再建が続いた。

城址公園が再整備される過程で、戦国武将の銅像が登場した。岐阜公園の織田信長像【写真8】、大垣公園の戸田氏鉄像(1994年)【写真9】、高岡公



写真 8 織田信長像（岐阜公園）



写真 9 戸田氏鉄像（大垣公園）



写真 10 前田利長像（高岡公園）



写真 11 山内一豊と妻の像
（郡上八幡城山公園）

園の前田利長像（1975 年）【写真 10】、郡上八幡城の山内一豊と千代の像（1985 年）【写真 11】などがある。徳川家康像は、岡崎公園、駿府城公園【写真 12】、浜松城公園などの縁の城に次々と設置された。

また、戦時供出で撤去された銅像の再設置も続いた。徳島公園にあった甲冑姿の蜂須賀正勝像は、1965 年に袴姿の蜂須賀家政像に代わった【写真 13】。他



写真 12 徳川家康像（駿府公園）



写真13 蜂須賀家政像（徳島公園）



写真15 松平長政像（県庁前）



写真14 山内一豊像（県立図書館前）

には、山内一豊像（1996年、県立図書館前）【写真14】や松平長政像（2009年、県庁前）【写真15】、蒲生氏郷像（1988年、ひばり野公園）、津軽為信（2004年、弘前文化センター前）などがある。こうした銅像の再設置には開府や市制の周年を記念する目的が掲げられるが、そこには藩祖に再び着目することで地域性を表象しようとする地域の願望が見

られる。近代以降の藩祖の祭祀と銅像の設置がどのように結びついていったのかを次に取り上げてみたい。

2. 藩祖の神格化と銅像の設置

戦国三英傑のうち、昭和初期までに設置されたのは豊臣秀吉と徳川家康のみで、織田信長の銅像は見られない〔表1〕。確認できる最も古い織田信長の銅像は、1936年、清洲公園に設置された桶狭間出陣の信長像【写真3】で

ある。清州公園は、1917年の織田信長への正一位の追贈を記念して清州城本丸を中心とする土地を清州公園建設が買収して本多静六と田村剛によって設計され、1922年に開園した。2012年、この像の隣に濃姫像（1992年設置）が移設された。

戦国武将のイメージの変遷について論じた呉座勇一によると、織田信長は江戸時代には冷酷非道で威圧的であるとして儒学者らに否定的な評価が下されており、明治に入ってもこの評価は大きく変わらなかったという。反対に、豊臣秀吉は江戸幕府によって威信を貶めたものの、江戸時代に広く読まれた『絵本太閤記』などの影響により、一貫して人気が高かった。織田信長に対する評価の変化は、徳富蘇峰が『近世日本国民史』（1918年連載開始）において、江戸時代の見方を否定し、革命児であると強調したことに起因する。1910年の韓国併合後の対外拡張路線の日本では、朝鮮出兵を行った豊臣秀吉と加藤清正の評価が高いのは当然であった〔呉座 2022〕。

こうして1903年、戦国武将として最初に大阪豊国神社に豊臣秀吉像が設置された。豊臣秀吉を祀る豊国大明神は江戸時代に廃されるが、明治に入ると国に存在する東照宮の権威を相対的に下げる目的から、豊国神社として復活し、湊川神社、東照宮に次ぐ3番目の別格官幣社となる〔表3〕。楠木正成戦死の地は、幕末には尊王攘夷を掲げる志士たちの信仰の対象となり、明治期に湊川神社として創建に至る【写真16】。

28の別格官幣社には、戦国三英傑を祀る神社や、建武の新政に尽くした皇族や武将を祀る「建武中興十五社」の他に、上杉神社や尾山神社、佐嘉神社、山内神社のような藩祖神社に由来するものがある。藩祖神社は、廃城令による城郭建造物の撤去と、東京在住の知藩事となった旧藩主の不在という地域の物理的・



写真16 楠木正成墓（湊川神社）

〔表3〕別格官幣社

現社名	所在地	主祭神	列格	由来
湊川神社	神戸市	楠木正成	1872年4月29日	古戦場
東照宮	日光市	徳川家康	1873年6月9日	
豊國神社	京都市東山区	豊臣秀吉	1873年8月14日	
護王神社	京都市上京区	和気清麻呂・広虫	1874年12月22日	
談山神社	桜井市	藤原鎌足	1874年12月22日	
建勲神社	京都市北区	織田信長	1875年4月24日	
藤島神社	福井市	新田義貞	1876年11月7日	古戦場
菊池神社	菊池市	菊池 武時・武重・武光	1878年1月10日	城址
名和神社	鳥取県西伯郡	名和長年ほか	1878年1月10日	邸宅跡
靖國神社	千代田区	戊辰戦争以降の戦没者	1879年6月4日	
阿部野神社	大阪市阿倍野区	北畠顕家・親房	1882年1月24日	古戦場
結城神社	津市	結城宗宏	1882年1月24日	古戦場
小御門神社	香取郡	藤原師賢	1882年6月4日	
照國神社	鹿児島市	島津斉彬	1882年12月15日	城址
常磐神社	水戸市	徳川光圀・斉昭	1882年12月15日	偕楽園
豊栄神社	山口市	毛利元就	1882年12月15日	祖霊社
靈山神社	福島県伊達郡	北畠親房	1886年4月22日	北畠邸宅
梨木神社	京都市上京区	三條実萬・実美公	1886年10月10日	邸宅跡
久能山東照宮	静岡市	徳川家康	1888年5月1日	
四条畷神社	四条畷市	楠木正行ほか	1889年12月13日	古戦場
唐澤山神社	佐野市	藤原秀郷	1890年11月27日	城址
上杉神社	米沢市	上杉謙信・鷹山	1902年4月26日	米沢城址
尾山神社	金沢市	前田利家	1902年4月26日	卯辰八幡社
野田神社	山口市	毛利敬親・元徳	1915年11月10日	豊栄神社
北畠神社	三重県一志郡	北畠顕能	1928年11月10日	邸宅跡
佐嘉神社	佐賀市	鍋島直正・直大	1933年9月28日	松原神社
山内神社	高知市	山内豊信ほか	1934年4月20日	藤並神社
福井神社	福井市	松平慶永	1943年9月20日	

神社ウェブサイトから作成

精神的喪失感を埋める意味が込められていた。藩祖を祀る 62 社のうち仙台城址の青葉神社（1874 年創建）、鶴岡城址の鶴岡神社（1875 年創建）、春日山城址の春日山神社（1894 年創建）のように、18 社が城址に置かれた〔森岡 2003:128-131〕。

城址公園における銅像と神社の配置は、昭和初期に描かれた鳥観図から確認できる。弘前公園【図 1】と高知公園には天守の前に銅像が立ち、天守が撤去された岩手公園には藩祖を祀る桜山神社と、日露戦争で死去した南部家第 42 代当主の南部利祥（1882～1905）の銅像があった。

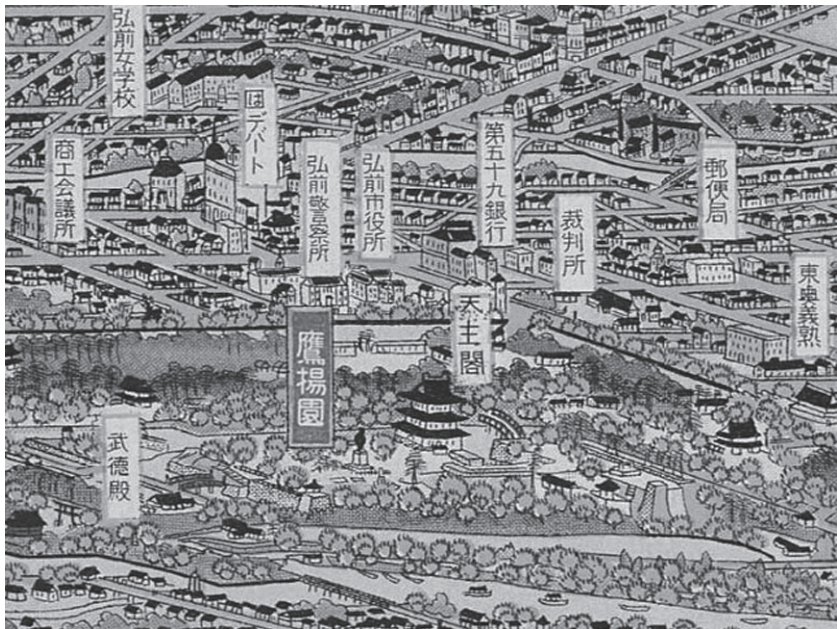


図 1 弘前公園鳥観図
吉田初三郎鳥観図データベース
<https://iiif.nichibun.ac.jp/YSD/>



写真 17 加藤清正像（本妙寺）



写真 18 伊達政宗像（青葉山公園）



写真 19 加藤清正像（能楽堂前）

1935 年設置の加藤清正像【写真 17】と伊達政宗像【写真 18】は、昭和初期の軍国主義化と地域性の復興という時代背景を如実に示す銅像である。加藤清正像は戦国三英傑に続いて多く設置されてきた銅像であり、確認できるだけで、出生地の名古屋の妙行寺、名古屋城址、能楽堂前【写真 19】、長浜豊国神社、熊本城行幸橋前、本妙寺と 6 体あり、その多くが大規模な作りとなっている。

本妙寺はもともと加藤清正が父・清忠の菩提寺として大阪に建立したものであり、1588 年、熊本城内に移した。1611 年に死去した清正の遺言に従って中尾山に埋葬され、浄池廟が築かれた【写真 20】。その後、浄池廟を保護するため熊本城内から本妙寺が移設された。明治の神仏分離令で浄池廟と本妙寺が分けられ、社殿が熊本城址に移されて加藤神社となった。肥後熊本藩第 2 代藩主となった加藤清正の三男・忠広は、1632 年、改易を命じられ熊本城を去り、代わりに細川氏が転封す

るが、細川氏は人々の信仰を集めていた本妙寺を丁重に扱った。本妙寺は、病気治癒や商売繁盛の流行神としての清正公信仰の中心地となり、その様子は関羽信仰を彷彿とさせるものだったという。朝鮮に出兵した加藤清正は、明治半ばには、軍神として称えられ、本妙寺や加藤神社で大規模な儀礼が行われるだけでなく、教科書や唱歌にも頻繁に登場した〔福西 2012〕。



写真 20 浄池廟

清正公没 325 年を記念して、1935 年、本妙寺に加藤清正像が建立された。制作者は児玉源太郎像や山形有朋像などを手書けた北村西望（1884～1987）である。銅像は戦時供出されたが、1960 年に再建された。設置場所や像の風貌について北村西望は自著『百歳のかたつむり』において以下のように語る。

この銅像が立っているところは、熊本市内を見おろす石段の上で、非常に見晴らしがいい。像高は既述のように 2 丈 7 尺、これが台座上にあるから、仰ぎ見る巨像というふうに映るだろう。だが、清正公は肥後 54 万石の太守であり、名将であり、治政、治水、築城の妙を心得ていて、領民に아가められた。従って、熊本市内を見おろす場所にあるのは、この像にいかにもふさわしいと思う。またその大きさも、仰ぎ見られるような状態でこそふさわしいはずと、私は信じている〔北村 1983:114〕。

この記述から制作者が銅像は仰ぎ見られる存在であると認識していたことがわかる。ここで巨像というのは、高さ 8 メートルほどで、右手に十字槍を持ち、左手を腰に当て、長い烏帽子兜をかぶった加藤清正の姿である。実際に、加藤清正は身長が 1.8 メートルほどの大男だったことが鎧の大きさから

判明している。

没300年を記念して1935年に仙台北丸跡に建立された伊達政宗の騎馬像（小室達制作）は、宮城の人々の念願を達成したものであった。各地で藩祖神社が創建された明治初期、伊達政宗を祀る青葉神社が創建され、1914年、宮城県は同社を県社から別格官幣社へ昇格させるようお願い出た。これに際して、1902年に県社から別格官幣社へ列せられた上杉神社と尾山神社の昇格願書が参考にされた。それは、別格官幣社が主に「建武中興十五社」や戦国三英傑、薩長土肥の藩祖を祭神とする中で上杉神社と尾山神社が青葉神社と条件が似ていたためである。しかし、1915年に別格官幣社となったのは野田神社のみで、「賊軍」というレッテルが貼られた旧仙台藩の青葉神社は昇格が認められなかった〔佐藤 2022:292-315〕。

伊達政宗公300年祭は、命日の5月24日を中心として一週間にわたって行われた。約800人から成る大名行列や仮装行列、博覧会を伴う一大イベントとなり、「御藩祖景氣」に沸く仙台には1週間で35万人が集まると計算された〔河北新報 1935年5月20日〕。1935年5月23日の『河北新報』には「五城楼下の護り 政宗卿銅像除幕式 けふ二千の青年団員が参列 天守台に晴れの盛儀」と題した記事には、「300年炳乎として輝く藩祖政宗公の遺徳を偲び宮城県聯合青年団が百年の後に残す記念事業として遂に造り上げた伊達政宗卿銅像除幕式は、23日新緑に輝く青葉城天守台で挙行することになった」と記されている。除幕式は5月23日10時15分、雨の中で始まり、6歳の伊達登美子が紅白の幕を引き、降神の儀、献饌、祝詞、参列者による玉串奉奠が続いた【図2】。

本妙寺の勇ましい加藤清正の姿は、軍国主義化が強まる中で「軍神」としての側面が強調されたものであり、仙台北丸跡の伊達政宗像は仙台藩の「賊軍」の汚名をはらす願望が込められていた。設置された背景は異なるが、ともに市内を見下ろすような高台にある大規模な銅像であり、戦時供出されるも地元の人々の強い願いで再建された点で共通する。銅像とは直接関係しないが、現在、熊本で7月に行われる清正まつりと、仙台で5月に行われる青



図2 『河北新報』1935年5月24日

葉まつりが1980年代に復活した点は興味深い。地域の伝統行事が復興した1980年代は駅前銅像が増えていく時期でもあったが、それは新幹線開通が地域の独自性を示す機会だと見なしたためであろう。

3. 新幹線開業と駅前銅像

駅前には新幹線駅開業や市制周年の記念に際して主に商工会議所によって戦国武将の銅像が建てられる。駅前の開発によって撤去や移設があるものの、現在、確認できる主要なものとしては、武田信玄像（1969年、甲府駅前）【写真21】、大友宗麟像（1982年、大分駅前）【写真22】、豊臣秀吉・石田三成像（1984年、長浜駅前）【写真23】、真田幸村像（1985年、上田駅前）【写真24】、井伊直政像（1987年、彦根駅前）【写真25】、北条早雲像（1990



写真 21 武田信玄像（甲府駅前）



写真 22 大友宗麟像（大分駅前）



写真 23 豊臣秀吉と石田三成の像
（長浜駅前）



写真 24 真田幸村像（上田駅前）



写真 25 井伊直政像（彦根駅前）



写真 26 北条早雲像（小田原駅前）

年、小田原駅前）【写真 26】などがある。比較的新しい東岡崎駅前の徳川家康像（2019 年）は日本最大級の騎馬像である。

駅前の銅像は、戦国武将だけではなく様々なものがあるが、設置主体は主に商工会議所である。市制周年や築城周年、新幹線開通などを記念して設置が決まり、市民から寄付を募る。例えば、井伊直政像は彦根商工会議所青年部創立 5 年の記念事業、真田信繁像は上田城築 400 年記念であった。

駅前の武将像として早期に設置されたのは甲府駅前の武田信玄像である。1969 年に除幕した高さ 6.5 メートルの像は、右手に軍配を持ち、左手に数珠を持って床几に座る姿であり、川中島の戦いにおける陣中の武田信玄を表す。1985 年の駅前広場の整備により現在の駅南口に移設された。台座には、設置の経緯が以下のように刻まれている。

われわれ山梨県民がひとしく敬仰してやまない、甲府の生んだ乱世の智将武田信玄公はただ戦略にひいていたばかりでなく、その民政においても抜群の力量を示し、甲斐の国こんにちの基礎を築かれた偉大な英雄であることは、今さらうんぬんの要はありません。

この崇高な人物をたたえ、遺徳をしのいで、よりよい山梨の建設に得心しようとする意気を高揚する意味から「武田信玄公奉賛会」を設立し、公の銅像を建立しようと企てました。

信玄公を尊崇する県内外諸名士各位の熱烈なご理解とご協力を得ましたので県民の最も多くの目にふれ親しみ深いこの地を選び建立した次第であります。

本会は昭和 42 年 6 月 25 日発足、越えて 43 年 4 月 8 日鋳入式を行ない 44 年 4 月 12 日武田神社例大祭日をばくして除幕式を行ない公の式男武田竜芳 15 代の末孫武田昌信氏家族により除幕されました。

そして本会々長野口二郎氏により甲府市長秋山清氏に本像の贈呈をいたしました。この間、会の運営に募金に諸工事施行に貢献的協力を寄せられた各位の芳名を記し、公正に伝えるものであります。（以下略）

1982年、大分駅前設置された大友宗麟像の台座の碑文は以下の通りである。作者の富永直樹（1913～2006）は長崎出身の彫刻家で、同郷の北村西望に師事し、グラバー園のグラバー像や分倍河原駅前の新田義貞像など数多くの像を制作したことで知られる。

16世紀半ば過ぎ世界地図のさいはて 日本列島の一つ九州が「ブンゴ」と記されていた頃 古代豊ノ国の名に恥じず「国も豊なれ 人も豊なれ」と念じて生きた男 その名を大友宗麟（義鎮）と号す

大友氏はその祖を源頼朝より出づると言われ約400年に亘り 九州一円に覇を唱え 就中 宗麟公の時代にはその威九州6カ国に及び中国 四国をも風靡した

（中略）

「緑あふれる豊かな人間都市大分」そこに人材雲の如く此の地に怒り 青雲の志を持つもの一世を覆うの気概に燃え 世界をリードする者出づるを願ひ日本芸術学院会員富永直樹先生に托し 宗麟公の像を茲に除幕する

昭和57年11月3日

大分市長 佐藤益美

7000万円で小田原駅前に設置された北条早雲像は、「火牛の計」を題材とした猛々しい姿を持つ。今川氏親の一武将であった北条早雲は、1493年、伊豆を征服し、1495年に小田原城を裏から攻め入り城主・大森家を追い払った。言わば下剋上を地でいく武将であった北条早雲は侵略者という側面も持つが、これに対して当時の小田原市長・山橋敬一郎氏は「歴史とロマン」が感じられると対応した〔朝日新聞1989年9月29日〕。

北条早雲像のように駅前の銅像は、設置の場所や人物の妥当性などに関してしばしば批判の対象となる。「政治駅」と揶揄される東海道新幹線岐阜川島前の大野伴睦夫妻の銅像は、大野伴睦が同駅設置に尽力したものの開通を見ることなく1964年5月29日に死去したことから、同年12月に設置された。

また、上越新幹線浦佐駅前には1985年、田中角栄像が設置されたが、戦後の著名な政治家として2体目となるこの銅像には反対意見も多かった。碑文には「依って昭和60年3月14日上越新幹線 同10月2日関越自動車道の開通を記念し

奥只見地域レク都市事業の早期実現を期して有志相集い 茲に田中角栄先生の銅像を建立し 不滅の功績と栄誉を称え悠久に威徳を顕彰する」と記され、地元への貢献が重視された。さらに、2005年には雪ざらしになって「かわいそう」という田中真紀子氏の意見を受けて、雪よけフードが作られた【写真27】。



写真27 田中角栄像（浦佐駅前）

駅前の戦国武将の銅像は二つの文脈から考える必要がある。第一は地域の基盤を築いた藩祖の顕彰であり、第二は地域の象徴としての駅前ランドマークの役目である。前者はこれまでの事例からわかるように、武将の銅像は地域の英雄として称えるために設置される。ただし、これは国鉄民営化以降に定着した一種の流行であり、戦前では一般的ではなかったことが『偉人の傍』から確認できる。

1929年までに駅前に置かれた銅像は、万世橋駅前の廣瀬武夫・杉野孫七像（1910年設置、1947年撤去）、上越北線（現、上越線）宮内駅前の星野次郎松像（1927年）、札幌駅前のジョセフ・クロフォード像（1929年）、松本荘一郎像（1929年）、平井晴二郎像（1929年）である。廣瀬武夫・杉野孫七像の設置は1912年の万世橋駅開業よりも前であったが、数多くの絵葉書などに登場したことにより、東京の観光名所となった。こうした絵葉書を通して駅前ランドマークとしての銅像の姿が広まり、渋谷駅前のハチ公像の設置に至ったと考えられる。1934年に登場した初代ハチ公像は戦時供出で撤去されたが、1948年に二代目が設置された。

戦後、廣瀬武夫・杉野孫七像のような軍国主義を彷彿とさせる銅像は撤去され、東京の中心部に設置されていた皇族の銅像も公園の片隅などに移設された。それに代わって、「平和」や「愛」といったテーマの銅像が駅前や公園に登場した。戦後から1960年までに設置された平和像について調査した山本・篠原（2010）によると、当時の資料が十分に残っていないだけでなく、像そのものも撤去されている例も多く、全体を把握するのは難しいと指摘する。確認できる45体のうち駅前に設置された8体が全て移設・撤去されている〔山本・篠原2010〕。戦前のハチ公像は「忠君」を象徴していた



写真28 桃太郎像（岡山駅前）

が、二代目のハチ公像は「平和」を表す銅像と見なされている。渋谷駅周辺の開発によって1958年と1989年の二度にわたって移動したが、現在でも渋谷駅の待ち合わせ場所となっている。1972年、新幹線開業を記念して岡山駅前にハチ公像のように待ち合わせ場所になってほしいという願いから桃太郎像が設置された【写真28】。

駅前の銅像には、地域の特色を表現するものが好まれるようになっていった。1980年代、各地域で新幹線が開業し、国鉄民営化によって地域に根差した鉄道の運営が期待されたことから、駅前の銅像は抽象的な平和や愛のイメージから戦国武将などの具体的なイメージに変化していった。城址の銅像は藩祖の厳格さを維持する必要があったが、駅前の銅像は大河ドラマ放送とのタイアップでもあるため、フィクション性が強くなり、東岡崎駅前の徳川家康像【写真5】のように戦場に赴く前の勇ましい騎馬像が比較的多く見られる。戦国武将の銅像のフィクション性は古戦場になるとより強くなる傾向がある。そこで、次に古戦場における銅像の特性を考えてみたい。

4. 古戦場の観光資源化

国指定史跡となっているのは、関ヶ原古戦場（1931年指定）、桶狭間古戦場伝説地（1937年、豊明市指定）【写真29】と長久手古戦場（1939年指定）【写真30】の3カ所である。桶狭間古戦場には、豊明市の他に名古屋市緑区があり、どちらが本当の古戦場であるかを争っている。緑区の桶狭間古戦場公園には2010年、モニュメントとして織田信長と今川義元の銅像が設置された【写真31】。設置主体となったのは2008年結成の桶狭間古戦場保存会であり、2000万円の寄付金を集め、像の製作を地元の彫刻家の工藤潔氏に依頼した。2010年5月16日の除幕式は、「桶狭間古戦場まつり」にあわせて開かれ、河村たかし名古屋市長と1万人の市民が参加した〔読売新聞2010年5月17日〕。

関ヶ原には、2020年10月21日、岐阜関ヶ原古戦場記念館が開館した。文書類を中心に展示する従来の歴史資料館とは異なり、床面スクリーンなどのアトラクション型の展



写真29 桶狭間古戦場碑（豊明市）



写真30 長久手古戦場碑



写真31 桶狭間古戦場公園
（名古屋市緑区）



写真32 関ヶ原古戦場石田三成陣地碑

示を主軸とする同施設は、コロナ禍でありながらも家族連れなどの来館者を集めている。当地には記念館が開館する前には、1938年から1940年にかけて開戦地や決戦地、家康最初陣地・家康最後陣地、石田三成陣地などに石碑が立つ程度であった【写真32】。

この地が古戦場であったことを古くから伝えるのは、二つの塚の存在である。現在では、東首塚と西首塚と呼ばれる二つの塚はかつて首塚と胴塚という区分があり、1906年に「関ヶ原合戦戦死者首級塚」、「関ヶ原合戦戦死者胴塚」という碑が建立された。塚は関ヶ原の領主であった竹中重門が徳川家康の命で築いたと語られているが、史料で確認できる事実ではないという〔室井2022:184-189〕。

戦場では死者を埋葬するために築かれた首塚を中心とするかのように、古戦場の語りが形成されていった。川中島にも多くの首塚が築かれ、海津城主の高坂弾正が6,000ほどの遺体を埋葬した「屍塚」が最も有名な塚の一つであった。そこに、1903年、陸軍少将・福島安正（1852～1919）が「甲越直

写真33 甲越直戦之地碑
(川中島古戦場)

戦之地」と揮毫した碑が建立された【写真33】。この前年に皇太子（後の大正天皇）の行啓があったため、それに合わせて川中島観光案内所が置かれるなど、古戦場の観光化が進んだ。この時期、川中島観光の起点となる篠ノ井と塩尻を結ぶ篠ノ井線は1902年に開通し、1906年に開通した塩尻－八王子間を走る中央東線と合わせると、東京方面から川中島

へのアクセスが格段によくなった。

日清・日露戦争期には、古戦場は近代国家の歴史を物語る場所と見なされ、湊川神社や藤島神社などの創建につながるとともに、古戦場をまとめた書物が刊行された。例えば、1900年刊行の『歴史地理叢書古戦場』（日本歴史地理研究会編纂）では全国36カ所の古戦場が時代順に並べられた。始まりは、「日本武尊東夷を征す」としてヤマトタケルと焼津が上げられ、以下、多賀城・胆沢城、衣河・鳥海・厨川の柵、金沢柵と続き、「豊臣氏滅亡す」の大阪城で終わる。前書きには、「戦争は実に日本歴史の骨髄たり、是を以て吾人の祖先が古来幾多の戦争に其血を流し、其骨を曝したる古戦場は、名山大川の間を点綴して、指顧に暇なからしむ」〔日本歴史地理研究会1900:5〕とあり、古戦場の来歴を理解する重要性を主張している。

1908年刊行の『川中島古戦場一週り案内記』では、川中島は関ヶ原と並ぶ著名な古戦場であり、信州人にとって「歴史的師表」であるとされる。「古戦場一周者のために」として、以下のように「甲越直戦碑」が古戦場の要であると紹介される。

篠の井停車場に下車すれば、西方に茶臼山の聳ゆるあり。平坦十余町、坂路二十余町にして達すれども、道を急ぐの士は登山せざるも可なり。又原町、丹波嶋、大塚等は、道順あしく、且つ古跡の見るべきもの今に存ぜざるを以て省略すべし。

略

此街道に沿ひ、北に進む数町にして胴合橋あり。又其北方に八幡宮あり。此辺一体の地は即ち八幡原にして、之ぞ川中嶋弔古者の観過すべかざる所に
して、直戦碑の建設せられてる地なり〔吉田1908:32-33〕。

川中島の戦いは、『甲陽軍艦』や『川中島五戦記』、『絵本甲越軍記』、『甲越信戦録巻』などの書物および歌川国芳（1798～1861）やその弟子の歌川国員（生没年不明）らの錦絵の題材となった。武田信玄と上杉謙信の一騎討ち



図3 川中島合戦
『絵本読本 課程教育日本歴史』



写真34 一騎討ちの像
(川中島古戦場)

を見せ場とするこれらの作品はフィクション性が強かったが、広く庶民に親しまれた〔長野市立博物館 2011〕。

1910年、東京尚美堂から刊行された『絵入読本 家庭教育日本歴史』における川中島合戦の絵【図3】は、江戸時代の錦絵に基づき、武田信玄と上杉謙信の二人に焦点が絞られた構図となっている。この構図が川中島古戦場八幡社（現、川中島古戦場史跡公園）に設置された一騎討ちの像【写真34】に最も近い。

1966年に設置されたこの像は、古戦場の銅像で最も古いものである。1969年NHK大河ドラマ『天と地と』の放映を記念して、長野観光協会が企画し、グリーンスタンプ（株）と青木電器（株）が寄進した。原型製作は、後藤光行（華陽造形研究所所長）、植木力（一陽会会員）、西村公朝（東京芸術大学助教授）、伊東繁（東京芸術大学助教授）、金丸家喜（日展作家）、佐藤允了（行動美術協会会員）である。

駅前銅像の事例からもわかるように、近年の銅像設置には大河ドラマの影響が非常に大きい。武蔵と小次郎の像、源義経と平知盛の像は、ともにNHK大河ドラマの放送にあわせて設置されたもので、フィクション性が強く、除幕式がイベント化している。

高さ約2メートルの繊維強化プラスチック製の小次郎像（2002年設



写真 35 小次郎と武蔵の像（巖流島）

写真 36 源義経と平知盛像
（みもすそ公園）

置）と武蔵像（2003 年）【写真 35】が 2002 年の NHK 大河ドラマ『武蔵 MUSASHI』の放送にあわせて巖流島（船島）に設置された。像のデザインは下関市が公募し、市在住のグラフィックデザイナー広瀬直樹氏のものが選ばれた〔毎日新聞 2002 年 11 月 26 日〕。下関市のみもすそ公園において 2004 年 12 月 12 日に行われた源義経と平知盛の像【写真 36】の除幕式には大河ドラマで主演を演じる滝沢秀明と中越典子が参列した〔毎日新聞 2004 年 12 月 14 日〕。

古戦場の銅像や駅前の銅像は専ら地域活性化を目指したモニュメントという側面が大きく、崇拜や顕彰の意味を込めて作られた城址の銅像とは異なる。近年、城址の建造物再建に関して基準が厳しくなったこと、すでに城址にはいくつも銅像や碑があるといった理由から、戦国武将の銅像は駅前や古戦場に設置場所を拡大したと考えられる。

おわりに

本丸跡の重要性は、各地の城址公園に建てられた「本丸跡」の碑から伺うことができる【写真 37】。そこに置かれる銅像は、「本丸跡」という碑に相当する地域を象徴する重要な人物、すなわち、藩祖またはそれに準ずる人物



写真 37 長篠城址碑

が適切と見なされた。建造物の撤去や堀の埋め立てなどの公園化は、伝統的な空間秩序を喪失させたため、その秩序を復活させるかのように藩祖の銅像が建立された。

城址という神聖な場所に設置が許されたのは、神格化された武将であった。徳川家康や豊臣秀吉、加藤清正、前田利家のように江戸時代に

神格化された人物から、明治期に神格化された楠木正成まで多様であるが、大衆的な読み物として江戸時代に広がった戦国武将の物語化と、地域や国家の統合の象徴として崇める対象となっていく神格化が結びついたことが武将の銅像の設置につながったのだろう。

漢字文化圏である日本では古くから碑文や位牌などの文字を通して偉人の顕彰を行ってきた。最初の銅像とされる大村益次郎像も碑文が刻まれた台座に立っているため「碑文が主で肖像が従」[木下 2007:304] という印象を与えるという。大村益次郎像は、文字による顕彰から写実的な銅像による新しい顕彰への過渡期の特徴を示す。また、金属の像と言えば仏像などの神像であり、実在した人物は肖像画か木像にその姿が残されてきた。兼六園のヤマトタケル像も、宗教的な金属の像から世俗的な人物顕彰像への過渡期の特徴を示す。実在した人物を人々から仰ぎ見られる存在へと昇華させたいという願望は、公共の場における銅像設置によって具体化された。こうした偉人や英雄の昇華について橋本章は、「太閤秀吉は神になり庶民の人気を得たが、それは秀吉という人物の帯びる“物語”がある種の神と化したのであって、生前の秀吉が徳を高めるなりして自身を神に昇華させたのとは違う…彼が神として祀られたことも含めての“物語”なのであり、彼の物語を語り継いだ人びとの思いが結実し、あるいは何かの願いが仮託されたひとつの結果」[橋本 2016:174] であると指摘する。

戦国武将の昇華は続いている。戦後に建てられた銅像には、分倍河原駅前の新田義貞像や阿部野神社の北畠顕家像、水戸の徳川光圀像などがある。銅像は西洋から導入されたもので、かつ、それが立つ場所は公園や広場、庁舎前など近代を象徴する場所であるため、過剰な西洋化への拒否感は常にくすぶっていたものの、藩祖などの神格化した人物に留まらず、地域に貢献した人物を顕彰したいという願望は近代日本で広がり続けた。これは日本に限ったことではなく、近代化の過程で銅像が乱立するのは近代国家の定番の現象であった。銅像の除幕式は、近代国家の威信を示す華々しいイベントだったためである。

それでも銅像が土着化するにつれて誰の銅像をどこに建てるべきかというルールは形成されていったと考えるべきであろう。明治天皇と同時期の君主であるイタリアのヴィットーリオ・エマヌエーレ2世の銅像とドイツのヴィルヘルム1世の銅像がイタリアとドイツにそれぞれ幾つも建っているのに対して、明治天皇の銅像は戦後、岐阜県護国神社と盛岡八幡宮（旧、護国神社）に設置されたのみである。明治天皇の銅像建立の動きはあったが、結局、明治神宮の創建に落ち着き、小型の記念銅像のみが作られた。中国では毛沢東像が、台湾では蒋介石像が何百何千という単位で作られたことを考えると、近代国家建設の中で銅像を導入した国や地域において、それがどのように根付いていったかを政治文化という側面から検討する必要がある。

もう一つ検討すべき点は、天守と銅像の位置関係である。本丸跡の銅像としてふさわしいのは藩祖またはそれに準じる人物という概念が育まれたのはこれまで見てきた通りであるが、現在では津軽為信像も松江城の松平直政像は本丸外に再設置されたように、現存天守の正面に銅像が再設置される事例は確認できない。現存天守もしくは木造復元天守と銅像が一つのフレームに収まるような構図は少なく、他方、復興天守および模擬天守と銅像は一望できる位置関係にある。例えば、2体の加藤清正像と名古屋城天守、織田信長像と岐阜城、豊臣秀吉像と墨俣城、徳川家康像と岡崎城、戸田氏鉄像と大垣城などがある。

国宝5城の例で言えば、今のところ、姫路城、松本城、犬山城には銅像がない。姫路城に銅像がない理由は冗談のように「池田輝政が地味だから」と語られるが、地域性を表す真正な天守が存在するため、あえて銅像は必要なかったとも言える。反対に、早々に公園化した盛岡城本丸跡には南部利祥像、仙台城本丸跡には伊達政宗像が設置された。南部利祥像は再設置されず台座のみが残るが、伊達政宗像は戦後まもなく再設置され、仙台城に君臨し続けている。近年では伊達政宗騎馬像をモチーフとした商品も販売されているように、銅像そのものが地域性を表すアイコンとなっている。

明智光秀像が明智駅前ではなく、アクセスのあまりよくない山の上の本丸跡に設置されたのは妥当であり、城址という神聖な場所に銅像を建てたいという地域の人々の願望が見えるのである。

本研究は、科研費基盤研究B「『模する』技術の発展と伝統的習俗の変容についての学際的研究」（代表：野口直人、19H01395）の助成を受けたものである。

参考文献

井上江花

1936 (1913) 「高岡銅像論」『江花叢書 14 (越中史論賛)』江花会出版

浦崎真一

2015 「長岡安平の公園設計書にみる着眼点の傾向と設計思想」『ランドスケープ研究』78 (5)、413～418

北村西望

1983 『百歳のかたつむり』日本経済新聞社

木下直之

2007 『わたしの城下町：天守閣からみえる戦後の日本』筑摩書房

呉座勇一

2022 『戦国武将、虚像と実像』角川新書

佐藤雅也

2022 『近代民主の生業と祀り：労働・生活・地域祭祀の民俗変容』有志舎

高野信治

2022『神になった武士：平将門から西郷隆盛まで』吉川弘文館

野中勝利

2010「近世城郭の城址に建設された模擬天守閣の建設経緯と意義：戦前の地方都市における模擬天守閣の再建に関する研究 その2」『日本建築学会計画系論集』75(652)、1471～1479

2017「本多静六による和歌山城址の公園設計における風致の位置づけからみた評価と公園整備」『都市計画論文集』52(2)、103～115

野村玄

2012「豊国大明神号の創出過程に関する一考察」『史学雑誌』121(11)、1878～1900

羽賀祥二

2005「産業都市化と郷土史の形成：名古屋における博覧会と歴史祭典」若尾裕司・羽賀祥二(編)『記録と記憶の比較文化史：史誌・記念碑・郷土』名古屋大学出版会、328～357

橋本章

2016『戦国武将英雄譚の誕生』岩田書院

福西大輔

2012『加藤清正公信仰：人を神に祀る習俗』岩田書院

本康宏史

2021「金沢・兼六園」小野芳朗・本康宏史・中嶋節子・三宅拓也(編著)『図説大名庭園の近代』思文閣出版、37～69

光井渉

2021『日本の歴史的建造物：社寺・城郭・近代建築の保存と活用』中公新書

宮田登

1970『生き神信仰』塙書房

室井康成

2022『増補版 日本の戦死塚：首塚・胴塚・千人塚』角川ソフィア文庫

森岡清美

2003「明治維新时期における藩祖を祀る神社の創建：旧藩主家の霊屋から神社へ、地域の鎮守へ」『淑徳大学社会学部研究紀要』37、125～148

2007「明治維新时期における藩祖を祀る神社の創建(続)：神社設立事情を手がかりとして」『淑徳大学総合福祉学部研究紀要』41、89～108

矢野敬一

2006『慰霊・追悼・顕彰の近代』吉川弘文館

山本陽・篠原修

2010「戦後復興期の屋外彫刻設置に関する研究：アーバンデザインとしての屋

外彫刻の歴史的展開に関する研究Ⅱ』『景観・デザイン研究講演集』6、395～400

その他

武田仰天子（編）

1910『絵入読本 家庭教育日本歴史 四の巻』東京尚美堂

中部日本新聞社（編）

1964『日本の古戦場』東京中日新聞出版局

鐵道省（編纂）ジャパンツーリストビューロー（日本旅行協會）

1938『武士道精神の華 古戦場（祖國認識旅行叢書第6輯）』博文館
長野市立博物館

2011『長野市立博物館所蔵資料で綴る 川中島の戦い：史実と虚構の世界』
日本歴史地理研究会（編纂）

1900『歴史地理叢書古戦場』六盟館

吉田頼吉（編）

1908『川中島古戦場一ト週り案内記』金華堂書店

田中修二（監修）

2009『偉人の徧』（1928年刊行）ゆまに書房

新聞

「銅像づくし」『東京朝日新聞』1907年4月8日

「銅像の大流行—不調和な建設地」『東京朝日新聞』1913年6月11日

「社説 銅像記念碑の流行」『東京朝日新聞』1913年6月13日

「“御藩祖景気” 沸騰」『河北新報』1935年5月20日

「藩祖公三百祭 清めの雨に幕開く」『河北新報』1935年5月21日

「五城楼下の護り 政宗卿銅像除幕式」『河北新報』1935年5月23日

「登美子姫の手で紅白の幕サツト落つ」『河北新報』1935年5月24日

「江戸時代を今に 華麗な大名行列」『河北新報』1935年5月25日

「善政家が侵略者か、北条早雲の騎馬像建立巡り論戦 小田原市議会」『朝日新聞』1989年9月29日

「北条早雲像がやってきた 小田原」『朝日新聞』1990年4月1日

「城 町・村おこしはコレに限る 全国で建築ラッシュ 専門家は苦虫」『読売新聞』1991年4月21日

「復元された掛川城天守閣、38日目で入館者10万人超す」『朝日新聞』1994年5月11日

「これぞ宮本武蔵だ！」『毎日新聞』2002年11月26日

「巖流島に小次郎立つ」『毎日新聞』2002年12月12日

「関門海峡に臨む山口県下関市の公園で」『毎日新聞』2004年12月14日

「桶狭間に1万人 古戦場まつり、銅像も除幕」2010年5月17日

「小田原城でコスプレ人気 武将、忍者… 観光促進、地元も歓迎」『読売新聞』2012年5月23日

「長野市の八幡原史跡公園名称変更 「川中島古戦場」案、可決へ 市会委全会一致 地元、誘客期待」『信濃毎日新聞』2017年6月21日

「戦犯の祈り、平和問う像 東京駅前、台座に遺書集 2度撤去経て再建・元刑務官ら奔走」『朝日新聞』2018年2月26日

「古戦場公園 交通の要所 合戦舞台に」『読売新聞』2019年4月10日

「義元公 19日お披露目 勇姿と品格 後世に 静岡駅北口広場に設置」『静岡新聞』2020年5月15日

「今川義元 地元にやっと銅像 静岡駅前 負のイメージ払拭へ」『中国新聞』2020年5月22日

「光秀、故郷で麒麟を待つ 可児にブロンズ像」『岐阜新聞』2020年6月14日

データベース

吉田初三郎鳥観図データベース

<https://iif.nichibun.ac.jp/YSD/> (2022年8月1日アクセス)

文化庁ウェブサイト

<https://www.bunka.go.jp/> (2022年8月7日アクセス)

「史跡等における歴史的建造物の復元の在り方に関するワーキンググループ」PDF